

日本の小学校教育のうまくいっている箇所を大事に

- (1)「ぜひ知ってほしい、日本の幼児・初等教育のよさ」と語るキャサリン・ルイス（ミルズ大学教授：日米の教育現場の調査を30年間にわたり続けている） 日本の教師を勇気付ける著書 土居健郎・キャサリン・ルイス・須賀由紀子・松田義幸『甘えと教育と日本文化』2005

私は、この本を読んでびっくりした。そして、とてもありがたかった。いろいろな答申が出されるたびに、現場はそれを追いかけるをえず、毎日の教育をする上で何が大切なことなのか分からなくなりそうなきだだったからだ。ルイス先生は日本の幼児・初等教育のよさを数多く見出している。しかも、良くこんなことまで知っているなあとおかしくなるほどだ。ルイス先生が30年間も現場の教育を調査・研究していることを知り、そのわけが分かった。つまり、ルイス先生は有名な人の著書やことばだけから判断し日本の教育について論述しているのではなく、自分の目で現場の子どもや教師をことこまかに観察した上で、論考をまとめている。だから、余計、この本を読んで、日々の実践に自信を持つことができた。

土居健郎さんも、「私自身ルイスさんの発見に促されて日本を再発見して驚いたといつて過言ではなかろう」と言っているくらいである。

- (2)日本の学校が本来持っている「子どもを育む力」

——世界でもまれにみる良い教育 それなのに日本ではあまり表に出ない —— p.147

①日本の小学校教育はすばらしい全人教育の場 149

- ・私の観察では、その基礎は幼児教育から土台ができています。
- ・日本の小学校の先生は、子どもの発達多くの面に心を向けているのです。学力面はもちろん、彼等の心の発達には友情も必要ですし、クラスをよりよいものにするにも必要ですし、体育や音楽、そして図工など全人的なことすべてに熱心に取り組むことも必要です。学校の先生は、そういう側面すべてに関して大変努力されています。162
- ・アメリカの教育では、それぞれの子どもが生まれながらに持っている特に優れたところの個性教育を重視する、と全く対照的です。172

②日本では、一人ひとりの成長が、クラス全体の成長の中で考えられる。153

- ・運動センスの良い子は、すぐにできるようになります。すると、必ずまだできない子を助けてあげたりアドバイスしたりということになり、園児同士の「つながり」が強まります。
- ・みんなのあたたかい気持ちや励ましが、その子を支える。このプロセスがとても大事だ。
- ・日本では、トレーニングや強制や賞罰ではなく、遊びの中で子どものやさしい気持ちや意欲をうまく引き出してのばしている。
- ・卒園アルバムや卒業文集・・・やはり仲間もあつてはじめて、自分自身の思い出もある

③クラスメートはもう一つの「家族」となる 155

- ・園のお誕生会のときに、「ジャンケン列車」という遊びで200人の園児全員がホールの中で一つにつながるのを見たときは壮観でした。
- ・日本では、歌や踊り、工作やお絵かきなどの日々のクラス活動やお誕生会、夏祭り、運動

- 会、遠足、お泊り保育などの行事すべてが「お友達」というコミュニティの意識、あるいは「家族のような」というコミュニティの感覚を強める教育の機会として提供されている。
- ・ですから、運動会は、一人ひとりの競走というより、どれだけみんなが一緒になって協力し課題に取り組んだかという発表の場なのです。できない子をクラスみんなが見守って助けてあげる、その子ができるようにする喜びをみんなで共有することにその目的があります。

#### ④個人的な問題もクラス前提の問題として考える 158

- ・朝の会、帰りの会があります。ここで先生は、園児たちの口から「あんなことがあった」という話を、クラス全体の問題として園児たちに話すのです。そして、クラスでの話し合いで、けんかになった子どもの思いを受けとめ、なぜけんかになったのかの本当の気持ちを確かめ、問題の本質を明らかにして、クラス全員でその解決をする責任があるというようにもっていくのです。
- ・毎日の帰りの会は、先生が自分の考えやクラスへの思いを伝える場でもあります。
- ・先生方は、これらのディスカッションで強引ではありません。答えをすぐに与えることをしません。むしろ、子どもが自分たちで問題解決の方向や方法を見出せるように支援するのです。そしてどんなに時間がかかってもみんなで考えるのです。
- ・この様子を観察しながら、この「時間と手間」が、実は、日本の幼稚園の本当のカリキュラムなのではないかと考えるようになりました。「自由遊び」はけんかもあるし、楽しいものでもあるわけですが、こういう問題解決のための素材を提供してくれます。

#### ⑤目標やめあてを中心とした学校活動 164

- ・日本の先生は、上手に「がんばる」気持ちを引き出しますね。スローガンのようにただ「がんばろう」というのではなくて、具体的に身近なところでがんばる目標を決めるのは、全人教育のための課題学習として優れた方法ですね。
- ・アメリカでは、「生来の能力、生まれながらの能力」のほうが重要だと考えます。この考え方の違いは、結果に大きな差が生じます。なぜなら、何か大きなハードルに直面したとき、子どもは「あきらめる」選択もできますし、「もっとがんばる」と選択もできるのですから。
- ・大切にす目標はなんといっても、「友達、親切、優しく、仲良く」でしょう。「元気よく」も大切にされる目標です。セルフマネジメントという価値にも重きを置きます。
- ・日本の学校では、これらの目標が決して飾りではなく、生きている。クラス活動の中で、例えば、「フレンドリーな行動とはどんなことだろうか」を具体的に話し合います。

#### ⑥「クラスのまとまり」が目標を受け入れる気持ちを育てる

- ・日本の教育者は数百人からなる学校というコミュニティの中で、どういうふうにして「まとまり」の感覚を生徒に持たせるかを重点的に考えています。
- ・先生方は、子どもたちとの関係を確かなものとするために「学級作り」に大変努力されています。1年生の最初の1ヶ月に学ぶ必要がある技能や態度として、勉強のことを挙げた先生が誰一人いなかったことに私は大変驚きました。

#### ⑦人との信頼関係がすべてのベースに 171

- ・先生と生徒の間の「絆」をととても大事にするのですね。
- ・「関わり」ということばも、私が日本の教育現場で知った日本語の一つです。

- ・日本の先生方は、学力の向上だけでなく、生徒の人間的な成長に大変心を傾けています。そして強調したいのは、一人の人間としての成長と学力の向上とは一体だということです。
- ・日本の小学校は、科目の勉強だけでなく、学校行事に多くの時間を費やします。そこに教育的な価値をおいているからです。
- ・先生方は、学校生活の中で、生徒一人ひとりが「何かでがんばれる」「親切にする」お友達と力を合わせてやる」という楽しい経験ができるように導きます。そういう経験を重ねるうちに、子どもは「学校やクラスの一員」という帰属感を感じるようになります。この帰属感こそ、多くの研究者が指摘していることですが、人間の基本的なニーズです。帰属感が満たされている生徒は、アメリカでも、ポジティブな意識を示しています。
- ・アメリカの先生は、「クラスが静かにしている」「テストでよい点を取れる生徒が多い」といった規準で、教師としての仕事の成功をはかりがちですが、日本の先生方は、「子どもたちが幸せな思い出を作ること」が教育の中心です。私たちは、日本の先生方の姿勢を学ばなければなりません。

#### ⑧ 班活動は子どもたちの積極的な姿勢を生んでいる

- ・ルイス先生は、日本の班活動の特徴をただグループの「中で」何かをするというのではなく、グループ「として」仕事をする、と捉えていますね。

#### ⑨ 「反省」から自然な規律が生まれる

- ・ルイス先生がとても感心されていることですが、日本の子どもたちは「反省」するということがある。
- ・ルイス先生の観察によると、日本の学校は、生徒に自主的に責任を持たせる仕組みが整っていて、子どもにかなり自主性をまかせている。でも、それは放任ではなくて、先生方はきちんと気を配って生徒たちを見守っている。

#### ⑩ 「子どもは生まれながらにしてよい」という日本の考え方

- ・日本の目立つ特徴としては「子どもの目線に立つ」ということを大切にしている。そしてそのことが、基本的に自分が「良い子である」という認識を生むのです。
- ・「子どもは生まれながらにしてよい」という信念が、日本の子育て文化の中には、歴史的にもそして現代においても根付いていると思います。
- ・石を持った子どものケースでも、先生が、石をいったん子どもから預かり、その石を振りかざすことの危険性を説明し、そして、その子に石をまた返したのです。「責任を持ってその石を使いなさい。」といわれたほうが、「良い子」としてのアイデンティティを育てることにつながるでしょう。
- ・このような教育が可能なのも、日本の先生方が「子どもとは基本的によいものである」という認識に立っているからできる教育だと思います。子どもは大人が語ることの本質をきちんと理解することができる、そして理解できれば、それが子どもたちの行動を律する規範となるという考え方を先生方が持っているように思います。

#### ⑪ 日本ではむしろ問題が起こったほうが絆を強める 行動主義のアメリカでは真似できない

- ・行動主義では、ご褒美を与えたり、あるいは罰することを通して、その行動を直ちにコントロールすることが大事で、子供同士の絆を強めるとか、長い目で見て大切な価値観を内在化

するといったことはないがしろにされている。

- ・日本の先生は、何か問題のある子どもがクラスにいたほうが、そのクラスにとって良いことだ、と考えます。

⑫先生方は、子どもたちを長い目で教育している アメリカと最も違う点 190

- ・このことは、人間の教育には最も大事な点です。
- ・先生の方で子どもたちを統率するのと、長い時間かかっても子どもたち同士の自主的かかわりの中で問題解決をしたり学級経営ができるようになることとの違いを3つ捉えている。
  - 1 先生の心にゆとりができる
  - 2 自然に仲間から認められるという経験を積む
  - 3 子どもたち同士の批評は、大人のそれに比べて、子どもが持つべき「良い子」の自己像を失う恐れが少ない。同じ忘れ物調べでも、子供同士でやったほうがうまくいく。大人が直接関わると「良い子」のアイデンティティがこわれやすい。

⑬全人的な肯定的なものの見方・考え方を生むことが、学ぶ意欲も育てている 191

- ・学びの基礎としてのクラス作りがきちんと行われている。
- ・先生の方で軍隊のように統制するのではなく、子どもたちのエネルギーを自由に発散させたカオスのような状態の内から子どもたち自身が規律を作り、認め合って、一人ひとりの子どもの中にポジティブな自己像ができる、これが大切。
- ・そして、このように肯定的な子どもの心 (HEARTS) を育むことと、学ぶ力・知性的な人間としての心 (MINDS) を育むことは、表裏一体なのだというお考えにいたるわけです。

ルイス先生 <日本の小学校の学習の特徴>

- 1 積極的に楽しく課題に関われるように工夫されている。

そうすれば問題の本質に子どもたち自身で気付くことができるかに工夫されている。

- 2 学びが社会的であること。

1対1で分かればよいというのではなく、みんなで考え合ったり、それぞれの意見に耳を傾けて正しいことを知っていこうという姿勢。

- 3 結果よりもプロセスに重点があること。

がんばって考えることや思慮深いことが大切にされる。

- 4 学びもまた反省的である。

「この授業は自分の考え方を変えたか」「今日は何を学んだか」などと振り返る。

\*アメリカン教授法：早く、そして簡潔に

日本 : ねばっこく丁寧に探索する

「wet-learning」と名づけた。個人的で情緒的で、複雑な人間関係を大切にしたい学習法。間違えることも学びの中のごく自然な部分。こうしたことすべたが、日本の小学校では、「友達」「協力」「がんばること」といったクラスづくりがあるからこそできる教育なのです。